

【 復活のトロパリ 第4調 】

しゆのおんなで し は ふくかつのひかるおと  
主 女 弟 子 は 復 活 の 光 音

づれ を てんしより ききうけ えて、  
天 使 聞 受

げんそよりの ていざいをふる いすて、しと  
原 祖 定 罪 振 棄 使 徒

にほこりてい え り、し はほろぼさ  
誇 日 死 滅

れ、ハリストスか み は ふくか つして、せかいに  
神 復 活 世 界

おおいなる あわれみをたま えり。  
大 憐 賜

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしく どうざな るもの、ちゅう  
使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリスト スのえきしゃ、せい  
實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれた るふえ、ハリストスのあい  
神 撰 笛 愛

にみちた るうつわ、わがくにのこう  
満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコライ  
照 お 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため あめ、および  
 爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい  
 全世界 爲 生 命 賜 聖

さんしゃにいのりたまえ。  
 三者 祈 給

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこ おとせいしんにき  
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
 爾 初 我 國 於 己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの  
 外 來 者 知

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか  
 屬 神 子 爲 彼 等 神

みの おんちようを あたえ、ハリストスのきょうかいを たて  
 恩寵 與 教會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり  
 今 此 教會 爲 祈  
 たま あえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 蓋 我 等 其 諸子 爾  
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 大齋前の主日のコンダク 第6調 】

いまもいつうもよよに、アミン。  
 今 何時 世 世  
 えいちをたまい、ぜんちをあたうるしゅ、  
 睿 智 賜 善 智 與 主  
 むちのもののきょうどうし、まづしきものの  
 無 智 者 の 教 導 師 、 貧 乏 者 の  
 ほごしゃたるしゅさいよ、わがころをか堅  
 保護者 主宰 我 心 堅  
 ためてさとらしめたまえ、ちちのことば  
 悟 給 父 言  
 よ、なんぢわれにことばをあたえたまあ  
 爾 我 言 與 給

え、けだしみよ、わがくちはもださずして  
蓋 視 我 口 黙

なんぢによぶ、じれんなるしゅよ、われおちい  
爾 呼 慈 憐 主 我 陥

りしものをあわれみたまあえ。  
者 憐 給

司祭) ( 黙誦： <sup>せい かみ せいじゃ うち いこ</sup> 聖なる神、<sup>せいさん こえ もつ かしょう</sup> 聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
<sup>さんえい ことごと てんぐん ふくはい ばんぶつ む ゆう</sup> ヘルヴィムより讚榮せられ、<sup>ひと なんぢ ぞう しょう よ つく なんぢ もろもろ たまもの もつ これ かざ</sup> 悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、<sup>ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す そのすくい ため つうかい</sup> 爾が諸の賜を以て之を飾り、願う者に智慧と明悟とを與え、<sup>た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい</sup> 罪を行<sup>る</sup>者を棄てずして、其救の爲に痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、<sup>さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの</sup> 爾が聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と  
<sup>しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ</sup> なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を  
<sup>もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ</sup> 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と  
<sup>せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい</sup> を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる  
<sup>しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ</sup> 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) <sup>けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ</sup> 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる  
聖 神 聖 勇 毅 聖

じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ め  
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う き 殺、 せ い  
 聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ れ  
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う き、  
 聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん  
 光 榮 父 子 聖 神

に き す、 い ま も い つ も よ よ に、 ア ミ ン。  
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じょう せい の も の よ、 わ れ ら を あ わ  
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み、 せ い な る ゆ う  
 聖 神 聖 勇

き、 せ い な る じょう せい の も の よ、 わ れ ら を  
 殺 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。  
 憐

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ  
の光 榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

【 プロキメン 大齋前の主日 第8調 】

司祭) 慎みて聴くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

しゅ なんぢらの かみに ちかいを なして つくの  
主 爾 等 神 誓 作 償  
え よ 、

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに大なり、

しゅ なんぢらの かみに ちかいを なして つくの  
主 爾 等 神 誓 作 償  
え よ 、

誦經) 主爾等の神に

ちかいを なして つくの えよ、  
誓 作 償

【 アポストロス 使徒經 112端 ロマ書13章11節~14章4節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルが羅馬人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聴くべし、

誦經) 兄弟よ、今は我等が初めて信ぜし時に較ぶれば、救は更に我等に近し。夜過ぎて晝

ちか づけり、故に我等昏昧の 行 を除きて、光明の 甲 を衣るべし。我等晝に在るが如  
く、 行 を美 しくすべし、饕餮及び沈湎好色 及び邪侈、争鬪 及び嫉妬すべから  
ず。 乃 爾 等は我が主 イスス ハリストスを衣よ、肉 體の 慮 を慾に變ずる勿  
れ。 信の弱き者は、意見を詰らずして之を納れよ。蓋 或人は凡 の物 食うべしと信  
じ、弱き者は野菜を食う。食う者は食わざる者を 藐 る勿れ、食わざる者は食う者を  
議する勿れ、蓋 神は彼を納れたり。爾 は何人にして他人の僕を議するか、彼は己の  
主の前に立ち、或 は倒る。且 彼は立てられん、蓋 神は之を立つるを能す。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) 今は、わたしたちの救が、初め信じた時よりも、もっと近づいているからである。夜はふけ、日が近づいている。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか。そして、宴樂と泥酔、淫乱と好色、争いとねたみを捨てて、昼歩くように、つましく歩こうではないか。あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲を満たすことに心を向けてはならない。信仰の弱い者を受けいれなさい。ただ、意見を批評するためであってはならない。ある人は、何を食べてもさしつかえないと信じているが、弱い人は野菜だけを食べる。食べる者は食べない者を軽んじてはならず、食べない者も食べる者をさばいてはならない。神は彼を受けいれて下さったのであるから。他人の僕をさばくあなたは、いったい、何者であるか。彼が立つのも倒れるのも、その主人によるのである。しかし、彼は立つようになる。主は彼を立たせることができるからである。

\*\*\*\*\*

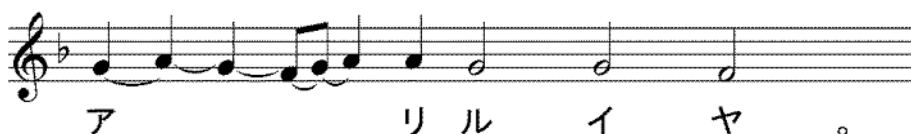
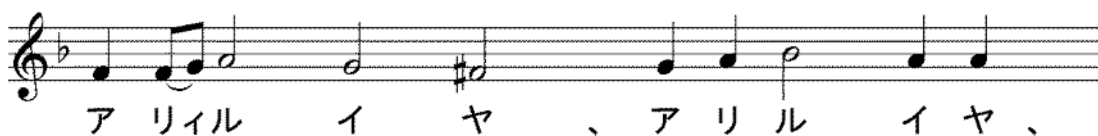
【 アリルイヤ 大齋前の主日 第6調 】

司祭) 爾 に平安、

誦經) 爾 の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、



誦經) <sup>しじょうしゃ</sup>至上者よ、<sup>しゅさんえい</sup>主を讚<sup>なんち</sup>榮し、<sup>な</sup>爾の名に<sup>うた</sup>歌<sup>び</sup>うは美<sup>かな</sup>なる哉、



誦經) <sup>なんち</sup>爾の<sup>あわれみ</sup>憐<sup>あさ</sup>を朝に宣<sup>なんち</sup>べ、<sup>まこと</sup>爾の<sup>よ</sup>真<sup>の</sup>を夜に宣<sup>び</sup>ぶるは美<sup>かな</sup>なる哉、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと</sup>人を愛<sup>あい</sup>する主<sup>しゅ</sup>宰<sup>さい</sup>よ、<sup>わ</sup>我が<sup>こころ</sup>心<sup>かみ</sup>に神<sup>し</sup>を知<sup>ちえ</sup>る智<sup>い</sup>慧<sup>ぎ</sup>の<sup>ひかり</sup>浄<sup>かがや</sup>き光<sup>わ</sup>を輝<sup>しねん</sup>かし、<sup>わ</sup>我が<sup>しねん</sup>思念

<sup>め</sup>の目<sup>ひら</sup>を啓<sup>なんち</sup>きて、<sup>ふくいん</sup>爾<sup>おしえ</sup>が福<sup>さと</sup>音<sup>たま</sup>の<sup>わ</sup>教<sup>うち</sup>を悟<sup>なんち</sup>らしめ給<sup>ふく</sup>え、<sup>いましめ</sup>我が<sup>い</sup>衷<sup>よ</sup>に<sup>こ</sup>爾<sup>ところ</sup>の福<sup>ところ</sup>たる<sup>ところ</sup>誠<sup>ところ</sup>を

<sup>おそ</sup>畏<sup>おそれ</sup>る<sup>い</sup>畏<sup>われら</sup>をも入<sup>ことごと</sup>れて、<sup>にくたい</sup>我等<sup>よく</sup>が<sup>ふ</sup>悉<sup>およ</sup>く<sup>なんち</sup>の肉<sup>よろこ</sup>體<sup>ところ</sup>の<sup>ところ</sup>慾<sup>ところ</sup>を踏<sup>ところ</sup>み、<sup>ところ</sup>凡<sup>ところ</sup>そ<sup>ところ</sup>爾<sup>ところ</sup>の喜<sup>ところ</sup>ぶ<sup>ところ</sup>所<sup>ところ</sup>

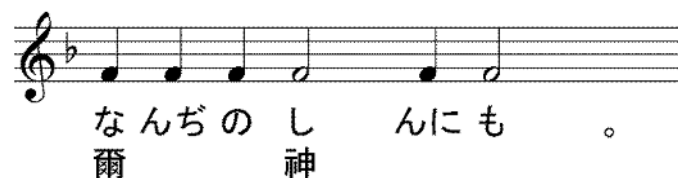
<sup>おも</sup>を思<sup>か</sup>い且<sup>おこな</sup>つ<sup>ぞくしん</sup>行<sup>せい</sup>いて、<sup>かつ</sup>属<sup>す</sup>神<sup>いた</sup>の生<sup>たま</sup>活<sup>けだし</sup>を過<sup>かみ</sup>ぐるを致<sup>かみ</sup>させ給<sup>かみ</sup>え、<sup>かみ</sup>蓋<sup>かみ</sup>ハリス<sup>かみ</sup>トス<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>よ、

<sup>なんち</sup>爾<sup>わ</sup>は我<sup>たましい</sup>が<sup>からだ</sup>靈<sup>こうしょう</sup>と<sup>われらなんち</sup>體<sup>なんち</sup>との光<sup>むげん</sup>照<sup>ちち</sup>なり、<sup>しせいしぜん</sup>我等<sup>しせいしぜん</sup>爾<sup>しせいしぜん</sup>と<sup>しせいしぜん</sup>爾<sup>しせいしぜん</sup>の無<sup>しせいしぜん</sup>原<sup>しせいしぜん</sup>の父<sup>しせいしぜん</sup>と至<sup>しせいしぜん</sup>聖<sup>しせいしぜん</sup>至<sup>しせいしぜん</sup>善<sup>しせいしぜん</sup>にし

<sup>いのち</sup>て生<sup>ほどこ</sup>命<sup>なんち</sup>を施<sup>しん</sup>す<sup>こうえい</sup>爾<sup>けん</sup>の神<sup>いま</sup>とに光<sup>いつ</sup>榮<sup>よ</sup>を獻<sup>よ</sup>ず、<sup>よ</sup>今<sup>よ</sup>も何<sup>よ</sup>時<sup>よ</sup>も世<sup>よ</sup>世<sup>よ</sup>に、<sup>よ</sup>ア<sup>よ</sup>ミ<sup>よ</sup>ン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書17端 6章14~21節 】

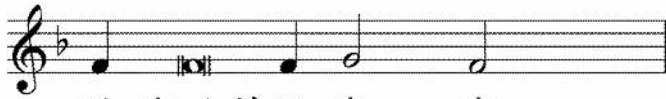
司祭) <sup>えいち</sup>睿<sup>つつし</sup>智<sup>た</sup>、<sup>せいふくいんけい</sup>肅<sup>き</sup>みて立<sup>しゅうじん</sup>て聖<sup>へいあん</sup>福<sup>へいあん</sup>音<sup>へいあん</sup>經<sup>へいあん</sup>を聴<sup>へいあん</sup>くべし、<sup>へいあん</sup>衆<sup>へいあん</sup>人<sup>へいあん</sup>に平<sup>へいあん</sup>安<sup>へいあん</sup>、



司祭) <sup>でん</sup>ルカ<sup>せいふくいんけい</sup>傳<sup>よみ</sup>の聖<sup>よみ</sup>福<sup>よみ</sup>音<sup>よみ</sup>經<sup>よみ</sup>の讀<sup>よみ</sup>、







は なんぢに き す 。  
爾 歸

司祭) 謹 <sup>つつし</sup>みて聴くべし、主 <sup>き</sup>曰えり、若し <sup>しゅい</sup> 爾 <sup>も</sup> 等人 <sup>なんぢら</sup> に其 <sup>ひと</sup> 過 <sup>そのあやまち</sup> を免さば、爾 <sup>ゆる</sup> 等の天 <sup>なんぢら</sup> の父 <sup>てん</sup> は 爾 <sup>ちち</sup> 等 <sup>なんぢ</sup>

ら <sup>ゆる</sup> にも免さん、若し <sup>も</sup> 人 <sup>ひと</sup> に其 <sup>そのあやまち</sup> 過 <sup>ゆる</sup> を免さずば、爾 <sup>なんぢら</sup> 等の父 <sup>ちち</sup> も 爾 <sup>なんぢら</sup> 等に <sup>あやまち</sup> 過 <sup>ゆる</sup> を免さざらん。

又 <sup>また</sup> 爾 <sup>なんぢら</sup> 等 <sup>ものいみ</sup> 齋 <sup>とき</sup> する時、偽善者 <sup>ぎぜんしゃ</sup> の如 <sup>ごと</sup> く憂 <sup>うれ</sup> わしき容 <sup>さま</sup> を爲 <sup>な</sup> す勿 <sup>なか</sup> れ、蓋 <sup>けだし</sup> 彼 <sup>かれら</sup> 等 <sup>そのものいみ</sup> は、其 <sup>ひと</sup> 齋 <sup>ものいみ</sup> の人 <sup>ひと</sup>

に <sup>あらわ</sup> 顯 <sup>ため</sup> れん為 <sup>か</sup> じ、顔 <sup>か</sup> 色 <sup>おいろ</sup> を損 <sup>そこ</sup> う、我 <sup>われ</sup> 誠 <sup>まこと</sup> に 爾 <sup>なんぢら</sup> 等に <sup>つ</sup> 語 <sup>かれら</sup> ぐ、彼 <sup>すで</sup> 等 <sup>そのむくい</sup> は已 <sup>う</sup> に其 <sup>なんぢ</sup> 賞 <sup>う</sup> を受 <sup>う</sup> け。 爾

の <sup>ものいみ</sup> 齋 <sup>とき</sup> する時、首 <sup>こうべ</sup> に膏 <sup>あぶら</sup> ぬり、面 <sup>おもて</sup> を洗 <sup>あら</sup> え、爾 <sup>なんぢ</sup> の 齋 <sup>ものいみ</sup> の人 <sup>ひと</sup> に <sup>あらわ</sup> 顯 <sup>ひそか</sup> れずして、隱 <sup>ところ</sup> なる 處

に <sup>いま</sup> 在 <sup>なんぢ</sup> す 爾 <sup>ちち</sup> の父 <sup>あらわ</sup> に <sup>ため</sup> 顯 <sup>しか</sup> れん為 <sup>ひそか</sup> なり、然 <sup>かんが</sup> らば 隱 <sup>なんぢ</sup> なるを <sup>ちち</sup> 鑒 <sup>あらわ</sup> みる 爾 <sup>なんぢ</sup> の父 <sup>むく</sup> は 顯 <sup>むく</sup> に 爾 <sup>むく</sup> に報

いん。 爾 <sup>なんぢら</sup> 等の為 <sup>ため</sup> に 財 <sup>たから</sup> を地 <sup>ち</sup> に積 <sup>つ</sup> む勿 <sup>なか</sup> れ、此 <sup>ここ</sup> 處 <sup>しみ</sup> には 蠹 <sup>さび</sup> と 锈 <sup>そこ</sup> と 損 <sup>ここ</sup> い、此 <sup>ぬすび</sup> 處 <sup>とうが</sup> には 盗 <sup>ぬす</sup> 穿 <sup>ぬす</sup> ちて 竊

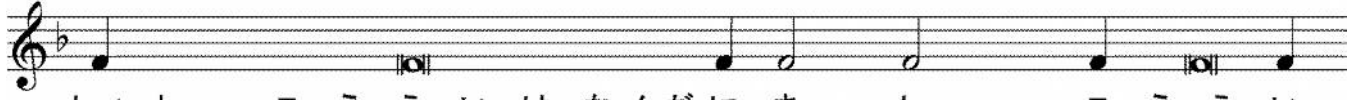
む。 乃 <sup>すなわ</sup> 爾 <sup>なんぢら</sup> 等の為 <sup>ため</sup> に 財 <sup>たから</sup> を天 <sup>てん</sup> に積 <sup>つ</sup> め、彼 <sup>かしこ</sup> 處 <sup>しみ</sup> には 蠹 <sup>さび</sup> も 锈 <sup>そこ</sup> も 損 <sup>かしこ</sup> わず、彼 <sup>ぬすび</sup> 處 <sup>とうが</sup> には 盗 <sup>ぬす</sup> 穿 <sup>ぬす</sup> ち

て 竊 <sup>ぬす</sup> ます。 蓋 <sup>けだし</sup> 爾 <sup>なんぢら</sup> 等の 財 <sup>たから</sup> の在 <sup>あ</sup> る 處 <sup>ところ</sup> には、 爾 <sup>なんぢら</sup> 等の 心 <sup>こころ</sup> も在 <sup>あ</sup> らん。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) もしも、あなたがたが、人々のあやまちをゆるすならば、あなたがたの天の父も、あなたがたをゆるして下さるであろう。もし人をゆるさないならば、あなたがたの父も、あなたがたのあやまちをゆるして下さらないであろう。また断食をする時には、偽善者がするように、陰気な顔つきをするな。彼らは断食をしていることを人に見せようとして、自分の顔を見苦しくするのである。よく言うておくが、彼らはその報いを受けてしまっている。あなたがたは断食をする時には、自分の頭に油を塗り、顔を洗いなさい。それは断食をしていることが人に知れないで、隠れた所においでになるあなたの父に知られるためである。すると、隠れた事を見ておられるあなたの父は、報いて下さるであろう。あなたがたは自分のために、虫が食い、さびがつき、また、盗人らが押し入って盗み出すような地上に、宝をたくわえてはならない。むしろ自分のため、虫も食わず、さびもつかず、また、盗人らが押し入って盗み出すこともない天に、宝をたくわえなさい。あなたの宝のある所には、心もあるからである。

\*\*\*\*\*



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい  
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮



は なんぢに き す 。  
爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ